

# 今夜も月を見よう

SAKURA

桜

## 月

どうしようもなくせつない時  
虚しい感情に支配される時  
ふと外に出てみれば  
そこでひっそりと夜空に浮かぶ白い月は  
何より私のところを柔らかに  
そして冴え冴えとしてくれる

雑念に惑わされるばかりの己とは対照的な  
何もかもを包みこむ  
宇宙の真理そのものが  
静かに音なく  
私に喝を入れる

人の喜怒哀楽から超越した  
宇宙の真理

でも間違いなくその中に私は居て  
その真理と一体となって  
日々一回転し  
年一周太陽のまわりを周り  
その影に隠れた時  
私は月を見つめている

すさまじい  
目もくらむような大きな渦の中にながら  
それを意識することは殆どなく  
小さな小さな現実の

囲われた生活にだけ  
目を向けているからこそ

時折真実の姿を見ては  
心を洗いたくなるのだ

## 夕暮れ

それは日暮れ時

静かに空が淡い青から薄いオレンジに  
ゆっくり染めかわっていく瞬間

その静寂へと向かう空間の境目で  
心の中に透き通るような懐かしさを感じるのは  
私だけだろうか

空には

キャンバスに色を重ねて表現するような  
美しさとは違う  
深さと遠さと優しさ  
悲しさまでも感じさせる「何か」があり  
見上げる度  
ほんの数秒間足を止めると  
たちまち私の心を吸い込み  
ゆっくりそこに浸み込ませていく

地球ごと空に包まれて生きているという  
本能的な安堵感なのか

それとも目には映らないなにかを感じるからなのか

## 人知れず

静かな雨音のなか  
人知れず  
瑞々しい葉を広げる小さな草花

ひたむきに  
ただひたむきに生きる

真っすぐでシンプル  
嘘いつわりのない姿

生きること  
命を繋げることにだけ  
意識を集中させている

だから美しい

濁りのない素直さそのものは  
それでよいのだと

それだけで十分なのだ  
気づかされる

## 記憶の糸

過去に  
 新鮮な印象を与えた  
 瑞々しくも懐かしい思い出の数々は  
 深く暗い記憶の湖底に眠りつつ  
 ゆらゆらと動く水流にしなやかな糸を泳がせながら  
 微かな連想の光を受け取ると  
 たちまち美しい触手となって  
 わたしの脳裏に  
 その映像を映し出してくれる

その時に感じた  
 僅かな匂い  
 皮膚の触感  
 耳に流れていた音楽

それらに触れた瞬間  
 その時  
 その場にいた自分自身に  
 懐かしく再会することができる

時の移ろいととも  
 あらゆるものが  
 色褪せていくなかで  
 その美しい記憶の糸だけは  
 いつまでも色鮮やかに  
 わたしの人生を彩り続ける

## 自然現象

地震で山は崩れまたは隆起し  
 津波はあらゆる陸地のものをさら  
 風雨は川の流れを激しくし土砂を押し流していく

恐ろしい自然現象は  
 自分たちには起きてほしくない現象でも  
 宇宙に浮かび常にくるくる回転している地球ボールにとって  
 不定期に起こる小さな揺れなど僅かな変化のひとつにすぎない

その薄っぺらな表面に這いつくばり生きている私たちは  
 それら変化を受け入れ  
 畏れの気持ちをなくさずにいることしかできない

やがては土に帰り  
 自然に起こる変化の中でまるで何も無かったかのように  
 かき混ぜられ  
 地層の一部と化してしまうだけのこと

それが自然という  
 とてもあらがえない大きさと  
 儚さ

## 足元の草

目の前のことから目を背けず  
ひとつひとつ丁寧に  
向き合う

結局この繰り返ししかない

どんなに逆風が吹いても  
耐えがたい孤独に苛まれても  
それを受け入れ  
自らで消化させる

与えられた環境のなかで  
今の今だけを見て  
自分にできるベストを考え  
やりぬく

そう  
あなたの足元に伸びる青い草を見よう

種の着地した場所が運命の郷となり  
そこで与えられる土壌  
陽の光  
恵の雨  
すべてを受け入れながら  
瑞々しい緑の葉を精一杯伸ばし  
次の命に託していく

その姿こそが  
すべての解  
かもしれない

## 本能

渡り鳥が生まれ故郷の水辺に帰ってくるように

遠い海路を経てウミガメが元の砂浜に産卵するように

私たちも子供を産み育て  
次の世代に命を託すのは  
とても自然なことなのだと分かっている

生きとし生けるもの全てに与えられた本能という地図は  
耳で聞こえず  
目で見えず  
どこから指令されるのかもよく分からないまま  
私たちを大きな渦に誘い込み  
行動を後押ししたり制御したりする

まるで遠隔操作されているかのように

それが本能というもの

耳を澄まして  
感じ取ろう

何処へ向かって  
進むべきか

何を求めて  
生きるのか

先人たちが繋いできた道標を辿りつつ

感性を研ぎ澄ませながら  
進んでいきたい

## 忘れ得ぬ風景

それは冬枯れの  
とてもよく晴れた日の夕暮れ時

薄暗くなりゆく地平の上に広がるのは  
光を帯びた淡いオレンジ色にどこまでも深く透き通る  
夕焼けの空

枯れた雑木林や田んぼの畦道  
音もなく遠く空を渡ってゆく数羽の鳥

その時の風景をつくるありとあらゆるものが  
太陽の影に隠れゆき  
刻々と黒いシルエットに変わりゆくなかで

その透明なオレンジ色の空だけは  
果てしない無限の空間を表現するかのよう  
広く奥深く悲しいほどに澄み渡り  
ひんやりと頬を冷たくする冬の匂いとともに  
幼い心に強く印象づけられた

そんな一瞬の風景が  
何十年も経った私の中で  
むしろ年を重ねる毎に  
強く美しく  
忘れ得ぬ故郷の風景として

浮かびあがる

## 日課

毎朝通る小路がある

その路の傍らに自生する  
美しい葉を広げる草木があることを知っている

それを確かめに毎日そこを通る  
それがわたしの日課でもある

その草木は毎日そこでわたしにささやかな癒しを与えてくれる

どんな天気  
どんな季節  
どんな災害がおころうと  
ただしっかりと根を張って  
その場所に居続ける使命

やがて枯れてなくなるまで  
生き続ける覚悟

その姿が愛おしく  
素晴らしく  
潔く  
そして美しく

わたしに生きる意味を教えてくれる

そして今日もまたそこを訪れ